

## 表層雪崩

零度線で分かれた明暗

・湿った新雪、なじみ悪く4滑る・

紫がかった青空を鋭くに切り込むように万年雪を抱いた八千<sup>ノ</sup>のクインプ山群の峰々が連なり、眼下には氷河が縞模様をみせながらゆったりとうねり氷河湖が点在している。幻想的なヒマラヤの風景を眺めての帰路、トレンキングルートの四千五百<sup>ノ</sup>地点でまさかの大雪と表層雪崩に襲われ、日本人やシェルの人たちの多くの遭難者がでてしまった。例年この時期のヒマラヤは雨季明けで天気が安定しており、雨もほとんど降らず四千<sup>ノ</sup>級のルートでも雪はなく日中も暖かく山歩きには最適な季節となっている。

ところが遭難時の十一月前後に限ってベングル湾のサイクロンから北上した湿った気流が雨季のようにネパールに流れ込むとともに、上空の天気図でみると気温の零度線層(が南下し高度四千二百<sup>ノ</sup>付近までにかかった。実際この零度層が運命を分けてしまったともいえる。

雨には暖かい雨と冷たい雨のメカニズム

があつて、このうち冷たい雨型でありは上空は雪だらけの状態となっており、零度層の下の暖かいところで解ければ雨に替わる。

今回のケースも冷たい雨型で下界では季節外れの豪雨となったが、高度の高いルート付近では氷点下となり一<sup>ノ</sup>を超す大雪となった。雨に換算するとおよそ百ミリ十一月の雨量の十年分が一日で降った計算になる。急に積もった湿雪はなじみが悪く表層雪崩を起こす。

先の遭難地点とは別のカンチエンジュンガ峰の近くでも雪崩事故が発生した。爆風が通り過ぎた直後に雪崩が襲ってきた」と生存者の一人が語っていた。この証言は、新雪による典型てきな表層雪崩だったことを物語。雪が斜面を滑り落ちる時、先端に軽い雪を巻き込んだ衝撃波のような爆風が先行する。そして次の瞬間に雪が襲いすべてを巻き込んでしまう。

サイクロンの動きも偏西風の流れも湿った気流の北上も、この季節としては想像をはるかに超えた異常さだった。そのうえ気温の零度層がまさにトレンキングルート付近の高

度にかかった。

その上か下で雨と雪に分かれ、湿り雪の大量積雪となって雪崩の多発、零度層が生死にかかわる分岐点となった。自然のすさまじさと運不運が重なって痛ましい惨事となってしまった。(一九九五年一月二五日)